

# 姥ヶ原・下原山南・ 下原山北遺跡

諏訪南インター原村工業  
団地内遺跡確認調査報告書

1989.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が姥ヶ原・下原山南・下原山北遺跡

## 序

私達人類は、この地球上に誕生してから約三百万年のときが経っていると言われていいます。そして人類の歴史のなかで、我々の先人たちは、少しずつ文明社会を築き上げて来ました。それは気の速くなるような試行錯誤の繰り返しのながで、淘汰され、発展し続けて現代文明へとつながって来たものです。そして、その一つ一つの過程が、現在の私達を説明する上で重要な役目を持つ、いわば人類の履歴書とも言えるものなのです。先人たちの残していった足跡は、現在、埋蔵文化財として土の中に静かに眠っています。その歴史の過程を後世に伝えていく事は、現代に生きる私達にとって重要な責務であると思われまます。

今回、報告書を刊行する姥ヶ原・下原山南・下原山北の各遺跡は原村内に造成が計画されている、工場団地予定地内の確認調査によって存在が確認されました。

この度の発掘調査にあたり、御配慮、御指導を頂いた関係各位に対し、深く謝意を表し、序といたします。

平成元年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

# 例 言

- 1 本報告は、長野県諏訪郡原村菖蒲沢に計画されている諏訪南インター原村工業団地内遺跡確認調査報告書である。
- 2 発掘調査は、原村土地開発公社の委託をうけた原村教育委員会が、昭和63年10月21日から11月22日にかけて実施した。整理作業は、昭和63年11月18日から平成元年3月10日まで行った。
- 3 現場における記録は平出一治・伊藤証・平林とし美、写真撮影は平出、図面の作図とトレースは平林、執筆は平出・伊藤・平林が話し合いのもとに行った。
- 4 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会が保管している。  
なお、本調査関係の資料には、姥ヶ原遺跡は51・下原山南遺跡は87・下原山北遺跡は88の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事小林秀夫・芦部公一、井戸尻考古館館長武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

# 目 次

序

例 言

目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	発掘調査の経過	1
III	調査の方法	2
IV	調査の成果	4
	1 姥ヶ原遺跡	
	2 下原山南遺跡	
	3 下原山北遺跡	
	4 その他の遺物	
V	ま と め	10
	参 考 文 献	
	発掘調査団名簿	

## I 発掘調査に至る経過

諏訪南インター原村工業団地予定地内の遺跡保護については、姥ヶ原遺跡（原村遺跡番号51）の規模・性格などが不明なまま、昭和62年6月5日に行われた「原村工業団地造成事業に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。

予定地は172,000m<sup>2</sup>と広い上に山林で、尾根幅の広いことが注意された。それは、昭和50年度から中央道の建設に先立って発掘調査が実施された阿久・大石・居沢尾根の大遺跡が山林であり、これほどまでの大遺跡と考えることができなかったことが教訓となっている。

標高は当地方における縄文時代の遺跡立地に適している上に、付近に大石・山の神などの大遺跡が存在している（表1・第1図）。そんなことから、姥ヶ原遺跡以外にも遺跡の存在は充分考えられる地域であった。

しかし、今までにしっかりした分布調査・発掘調査をしたことがなく、資料不足なこともあり適切な結論を導きだすことはできなかった。したがって、姥ヶ原遺跡の範囲と、新遺跡の有無を確認することが課題としてのこされた。出席者は長野県教育委員会文化課・原村土地開発公社・原村教育委員会の3者であった。

その後も原村土地開発公社と協議を進め、昭和63年10月21日～11月22日に試掘を伴う遺跡確認調査を実施し、姥ヶ原遺跡はその範囲を明確に、新たに縄文時代の2遺跡を確認した。

## II 発掘調査の経過

昭和63年10月13日 発掘準備をはじめる。

10月21日 発掘機材の搬入。テントの設置を行う。

10月24日 対象地域が広いので便宜上その地形から、まず南北に走る横道で東と西に分け、東側はさらに北尾根と南尾根に分けた3地区を設定し、東側北尾根（後に下原山北遺跡と呼ぶ）から試掘をはじめ。試掘穴は約20m間隔とする。



第1図 原村城の地形断面模式図（赤岳—姥ヶ原・下原山南・下原山北遺跡—宮川ライン）

縄文土器破片が出土する。

- 10月25日 引き続き東側北尾根の試掘を行う。縄文土器破片・打製石斧が出土する。東側南尾根の試掘をはじめめる。やはり縄文土器破片が出土する。
- 10月26日 引き続き東側南尾根の試掘を行う。北尾根と南尾根にはさまれた窪地の試掘を行うが、地表下20～30cmで地山の礫混じりの黒褐色土となる。打製石斧が出土するが、その試掘穴の位置から南尾根上から落下したものであろう。午後から、姥ヶ原遺跡の試掘をはじめめるが、その範囲を明確にすることに重点を置いた。したがって、想定されている範囲の周辺部からの調査を行う。
- 10月26日 姥ヶ原遺跡の試掘と、その西側の試掘を行う。  
姥ヶ原遺跡は地表下35～40cmで礫が出土する。礫の出土状態と、縄文時代中期後半から後期初頭という時期的にみて、集石・配石遺構の埋没は容易に推測できることで、礫出土面で調査を打ち切った。
- 10月31日 姥ヶ原遺跡の西側の試掘を行う。縄文土器破片が単発的に出土する。試掘穴の間隔を狭くするが、その後遺物の発見は無い。
- 11月1日 引き続き姥ヶ原遺跡の西側の試掘を行う。姥ヶ原遺跡は緑地帯（公園）として残されるため埋戻しをはじめめる。
- 11月2日 東側南尾根と北尾根の遺物出土周辺の試掘を行うが、雨のため作業は半日。
- 11月3日 雁頭沢遺跡の発掘調査のため今日から当分の間作業は休み。
- 11月18日 作業を再開する。東側北尾根の遺物出土地周辺の調査を行う。
- 11月21日 東側南尾根の遺物出土地周辺の調査と、機材の撤去を行う。
- 11月22日 取り残してある記録を行い調査を終了する。

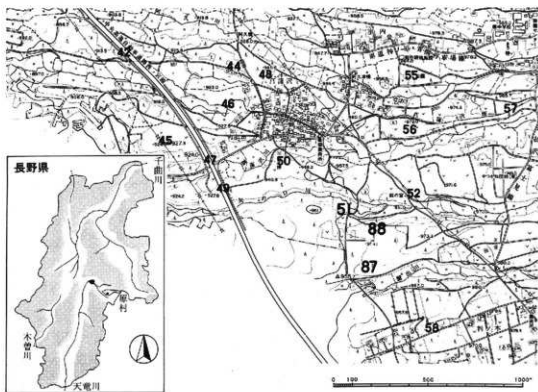
### Ⅲ 調査の方法

対象地域が山林で、172,000m<sup>2</sup>と広いことから（第3図）、アトランダムに試掘穴をあげ遺物の有無を確認する方法でおこなった。調査にあたっては、当地方における縄文時代の遺跡立地を考慮したこと、立木の状態でその密度は一定していない。また、遺物を発見した地域は出来るかぎり、散布範囲を明確にすることに重点をおき、遺物が出土した試掘穴を中心に新たな試掘穴は外へ広がるような調査を行った。

試掘穴の大きさは、70×70・80×80・80×90・90×90・100×100cmとまちまちであったが、385箇所の調査を（第4図）、原則としてソフトローム層の上面まで行った。礫の出土した試掘穴は、縄文時代中期末葉から後期初頭の土器破片が出土し、集石・配石遺構の埋没が考えられることから、調査は礫面で終わらせている。

表1 姥ヶ原・下原山南・下原山北遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
42	居沢尾根					○					○		昭和50-52年度発掘調査	
44	原山					○					○		昭和50年一部破壊	
45	広原日向	○			○	○					○		昭和58年度発掘調査	
46	宿尻													
47	ヲシキ		○	○	○						○		昭和51年度発掘調査	
48	檜の木					○							昭和53年一部破壊	
49	大石	○	○	○	○						○	○	昭和50年度発掘調査	
50	山の神					○	○				○		昭和54年度発掘調査	
51	姥ヶ原					○	○						昭和63年度試掘調査	
52	水掛平					○					○			
55	中尾根					○	○				○			
56	家前尾根					○					○		昭和51年一部破壊	
57	久保地尾根					○							昭和51年一部破壊	
58	判の木										○			
87	下原山南						○						昭和63年度試掘調査	
88	下原山北					○	○						昭和63年度試掘調査	



第2図 姥ヶ原・下原山南・下原山北遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

記録は、調査箇所・試掘の状態・遺物の有無などを公図に筆別に行った。

## IV 調査の成果

調査の結果、大きく分けて3箇所に遺物が集中することを把握した(第6図)。1箇所は周知の姥ヶ原遺跡であり、2箇所は新遺跡の発見である。2遺跡とも小字は「下原山」であることから、その位置関係から下原山南遺跡(原村遺跡番号87)と下原山北遺跡(原村遺跡番号88)に呼び分けることにした。

基本的な層序は、表土層・黒色土層・黒褐色土層・褐色土層・ローム漸移層・ソフトローム層である。なお、ソフトローム層までの深さは70cm前後を計る。

なお、平成元年度に諏訪南インター原村工業団地造成に伴う緊急発掘調査を計画しているため、発見した遺物は、基礎整理をただけで分析するまでに至っていない。したがってここでは、主なものに簡単な説明を加えるにとどめておきたい。

### 1 姥ヶ原遺跡

姥ヶ原遺跡(原村遺跡番号51)は、八ヶ岳西麓の長野県諏訪郡原村葛瀬沢にあって、葛瀬沢集落の南500mに位置している。東の八ヶ岳から流下する矢の口川と蟹出川によって北と南を浸蝕された東西に細長い台地が、遺跡の東方約500mで二つに分かれる。その二つのうち遺跡は北側の尾根で、矢の口川に面した緩やかな北斜面に立地する。これより西は、約1,000m先でホッツサマグナの西縁である糸魚川―静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

標高は950m前後を計り、地目は山林である。この付近一帯は畑地として利用された時期もある。長野県教育委員会が昭和54年度に実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査の折に、地主の五味富重氏から耕作中に土器破片と磨製石斧を発見したことを聞いている。その調査から小字名である姥ヶ原遺跡と呼称するようになり今日に至っている。なお、磨製石斧は現在原村教育委員会で保管している。それ以前の昭和49年に、諏訪清陵高等学校地歴部考古班が実施した分布調査で、縄文時代中期末葉の曾利式と後期の土器破片を採集し、稀沢日影遺跡と呼称していたときもある。

試掘調査の結果、遺物の発見は多く土器と石器がある。包含層はしっかりしている。年代の指標となる土器は縄文時代中期末葉から後期初頭で、注口土器の注口部分の発見もある(写真2)。発見した土器破片は159点を数え、石器は黒曜石の剃片10点、石鏃1点、凹石4点がある。石鏃と凹石は当地方にみられる一般的なものである。

遺物の多い試掘穴は集中し、礫の発見された試掘穴もほぼ同様な傾向にあった。それは遺物の





第3圖 原村工業団地計画範圍圖・地形圖 (1:6,000)

多い試掘穴に礎がみられる状態で、集石・配石遺構の埋没は容易に考えられる。なお、礎までは地表下35～40cmである。

試掘という限られた調査で、住居址の埋没を確認するまでに至らなかったが、集石遺構を伴う集落跡であると思われるし、その保存状態も良いようである。

遺跡は、遺物が発見された東西36、南北54mの範囲を想定した(第6図)。

## 2 下原山南遺跡

下原山南遺跡(原村遺跡番号87)は、新たに発見した遺跡で、姥ヶ原遺跡の南東方300m、下原山北遺跡の南方200mに位置する。

本遺跡の西方200mには、昭和49年に諏訪清陵高等学校地歴部考古班が実施した分布調査で、縄文時代中期の土器破片と土師器の破片を採集した下原山遺跡が茅野市地籍に所在している。地形的にみて本遺跡と下原山遺跡が同遺跡とは考えられないが、相互関係が無かったとはいきれない位置関係にある。

姥ヶ原遺跡で記載したように、二つに分かれた南側の尾根上平坦部に立地する。標高は960m前後を計る。地目は山林であり、後世に攪乱を受けたことがない非常に良好な状態で埋蔵されているようである。

遺物は11箇所の試掘穴から土器破片19点と打製石斧1点が出土した(第5図)。年代の指標となる土器は縄文時代後期初頭である。石器は打製石斧1点で、当地方にみられる一般的なものであるが(写真4)、使用による磨減は著しい。

試掘という限られた調査で、遺構の埋没を確認するまでには至っていない。調査した試掘穴の数からみて、遺物が出土した試掘穴は少ないし、遺物も少ない。その事実からみて、また、尾根上の平坦部もやや狭いようで、遺構の埋没は考えられない。

遺跡は、遺物が発見された東西44、南北21mの範囲を想定した(第6図)。

## 3 下原山北遺跡

下原山北遺跡(原村遺跡番号88)は、新たに発見した遺跡で、姥ヶ原遺跡の東方100m、下原山南遺跡の北方200mに位置する。

姥ヶ原遺跡で記載したように、二つに分かれた北側の尾根上平坦部に立地する。標高は965m前後を計り、地目は山林である。下原山南遺跡同様に後世に攪乱を受けたことがない非常に良好な状態で埋蔵されているようである。

遺物は15箇所の試掘穴から土器破片29点と打製石斧3点が出土した(第5図)。年代の指標となる土器は縄文時代中期末葉から後期初頭である(写真6)。石器は打製石斧3点で全て破損しているが(写真7)、当地方で一般的にみられるものである。

試掘という限られた調査で、遺構の埋没を確認するまでには至っていないが、比較的遺物が集中



第4圖 試掘穴位置圖(1:6,000)・試掘穴



第5圖 遺物出土試掘穴位置圖(1:6,000) ・試掘穴



第6図 遺跡範囲想定図 (1:6,000)

した試掘穴もあり、その性格までは判らなかつたが、何らかの遺構が埋没している可能性は高い。  
遺跡は、遺物が発見された東西67、南北30mの範囲を想定した（第第6図）。

#### 4. その他の遺物

この3遺跡以外でも8箇所の試掘穴から単発的に土器破片が出土している（第5図）。付近の試掘穴は間隔を狭めたが、新たな遺物が出土することはなく、遺跡として把握できる状態ではなかつた。

年代の指標となる土器は縄文時代中期中葉から後期初頭である（写真8）。

なお、参考までに遺跡別遺物数を表記した（表2）。

表2 遺跡別の出土遺物数

	土器破片	黒曜石剥片	打製石斧	石 鏃	凹 石
姥ヶ原遺跡	159	10		1	4
下原山南遺跡	19		1		
下原山北遺跡	29		3		
そ の 他	8				
計	215	10	4	1	4

## V ま と め

試掘という制約された調査であつたが、姥ヶ原遺跡はその範囲を明確にできたし、新しい遺跡の発見といい、当初の目的は達成できたものと思つている。

3遺跡とも縄文時代中期末から後期初頭という極短い期間であるが、遺物の出土状態に違いがみられた。それは性格の違いによるものと思われるが、それぞれが単独で存在していたとは考えられないこと、また、姥ヶ原遺跡の対岸に山の神遺跡があり、やはり同時代の土器が発見されていることを考えあわせると、この4遺跡は極めて関係の深いものであつたと思われる。縄文時代中期末から後期へ移行する時期の研究上において好資料とならう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

#### 参 考 文 献

1980. 03 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』  
1985. 07 原村役場『原村誌 上巻』  
1988. 12 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財小報5 原村工業団地内遺跡確認調査概報 姥ヶ原遺跡の確認と下原山南遺跡・下原山北遺跡の発見』

## 発掘調査団名簿

- 団 長 平林太尾（原村教育委員会教育長）
- 調査担当者 平出一治（原村教育委員会）
- 調 査 員 鶴田典昭（明治大学大学院）山形真理子（東京大学大学院）伊藤 証（原村教育委員会）
- 調査補助員 平林とし美
- 調査参加者 菊池利光 小池修次 芳沢一夫 小林静子 藤原智恵子 宮坂とし子 五味とし美  
中村順子 菊池卓子 中村ふさ美 五味かず美 小池一二三 五味まさ子（順不同）
- 事 務 局 原村教育委員会事務局——行田竹輝（教育次長） 武田伊都子（庶務係長） 大口美代子  
（主任） 佐貫正憲



写真1 姥ヶ原遺跡遠景（北東から）

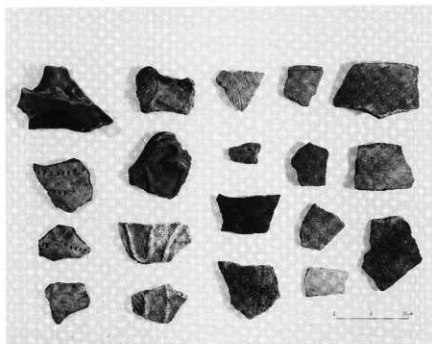


写真2 姥ヶ原遺跡出土土器





写真3 下原山南遺跡遠景（南東から）



写真4 下原山南遺跡出土土器と石器



写真5 下原山北遺跡遠景（北東から）

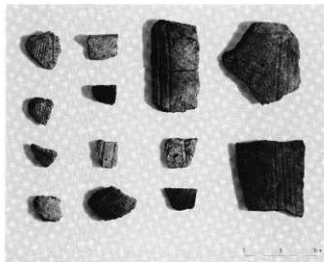


写真6 下原山北遺跡出土土器

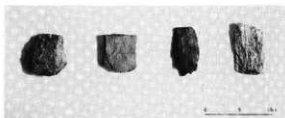


写真7 下原山北遺跡出土土器



写真8 その他の遺物



写真9 馬頭観音（諏訪南  
インター原村工業団地内）

原村の埋蔵文化財15

**姥ヶ原・下原山南・下原山北遺跡**

諏訪南インター原村工業  
団地内遺跡確認調査報告書

発行日 平成元年3月31日

発行 原村教育委員会  
長野県諏訪郡原村

印刷所 ミウラ企画書籍

